

# 改訂を待たずに今すべきこと

## ～「論点整理」の読み解きと2030年度を見据えた足場固め～

2030年度から順次実施予定の次期学習指導要領を「先の話」と捉えるのではなく、「主体的・対話的で深い学び」の実装に向けて、今できることは何か。ともに中央教育審議会教育課程企画特別部会委員を務める、埼玉県戸田市教育委員会の戸ヶ崎勤教育長と横浜国立大学の山本朝彦教授（附属小学校校長を兼務）が、子どもの成長を支える実践者の立場から語り合った。



埼玉県  
戸田市教育委員会  
教育長  
戸ヶ崎 勤



横浜国立大学 大学院  
教育学研究科 教授  
横浜国立大学教育学部附属  
横浜小学校 校長  
山本朝彦



とがさき・つとむ 戸田市教育委員会・埼玉県教育局指導主事、埼玉県立総合教育センター総合企画長、公立小・中学校校長等を経て、2015年度から現職。第12・13期中央教育審議会委員、教育課程部会副部長、教育課程企画特別部会委員、総則・評価特別部会委員等を兼任。教育長着任時から、産学官連携による知のリソースの活用や、「経験と勤と気合い」から「エビデンス」を重視したEBPM<sup>\*1</sup>の推進など、特色ある教育施策を展開。

やまもと・ともひこ 横浜市立小学校教諭、横浜市教育委員会主任指導主事、横浜市立西が岡小学校校長、横浜市教育委員会教職員育成課長、教育課程推進室長、学校教育企画部長を経て、2025年度から現職。中央教育審議会教育課程企画特別部会委員。教育委員会勤務時には、横浜市学力・学習状況調査の改訂と分析、カリキュラム・マネジメントの確立と充実、オンラインやバーチャル空間を活用した学びの空間の構築など、様々な施策を推進。

### 道半ばにある現行学習指導要領を学校現場とともに熟成させる

**齋藤** 教育行政や学校現場で日々マネジメントにあたる立場から、「論点整理」をどうぞ覧になりましたか。

**戸ヶ崎教育長（以下、戸ヶ崎）** まず大切なのは、教育長が自地域の文脈で「論点整理」を読み込み、理解することだと考え、私は生成AIを活用して100ページを超える「論点整理」に示された学校像を視覚化しました。「次期学習指導要領が目指す学校像は遠い未来の話ではなく、明日の授業改善へ直結する」ことが図やイラストを交えて分かりやすく整理された、1枚の資料ができました（P.13図1）。

**山本教授（以下、山本）** その資料を拝見しましたが、「論点整理」の趣旨

が非常に明解でした。

**戸ヶ崎** 当初、生成AIに原文のみを読み込ませましたが、難解な表現が目につきました。そこで、文部科学省の担当者による解説記事や、教育関係者が見解を述べたブログ及び動画なども参考に読み込ませたところ、学校現場の感覚に近い表現になりました。私自身も「論点整理」の要点などをより理解し、自分の言葉で語れるようになり、学校現場に分かりやすく説明できるようになったと思います。

**齋藤** 山本教授は小学校の校長も務められています。学校現場は「論点整理」をどう受け止めていますか。

**山本** 「論点整理」の「現行学習指導要領は道半ば」という記述には、多くの教員が安堵していました。大きな方向性は変わらず、現行学習指導要領を



『VIEW next』編集部  
小中領域担当責任者  
齋藤輝之  
さいとう・てるゆき  
高校、大学、行政、社会人領域を担当後、文教総研研究員を経て2023年度より現職。

熟成させていくというメッセージは、今の取り組みを頑張って続けようという教員の前向きな意欲につながっています。ただ、道半ばであるからこそ、教員が現行学習指導要領の理念を授業に落とし込めるように、引き続き指導主事や校長が支援することが重要だと考えます。

**戸ヶ崎** 同感です。今こそ「脚下照顧<sup>きやくかしょうこ</sup>」、つまり足元を見つめるべき時です。私は校長会で、「主体的・対話的で深い学び」や「社会に開かれた教育課程」「個別最適な学び」などの現

\*1 Evidence-based Policy Makingの略称で、政策の企画をその場限りのエピソードに頼るのではなく、政策目的を明確化した上で、合理的根拠（エビデンス）に基づくものとする。

行学習指導要領の理念を改めて説明しています。分かったつもりにならず、いま一度、現行学習指導要領への理解を深め、足場を固めるためです。

**山本** 認識の共有は必須ですね。例えば「深い学び」の捉え方も、教員間で違いが生じがちです(図2)。教育委員会には、現行学習指導要領の理念や「論点整理」の趣旨を整理し、学校現場の実践につなげ、それを教員と共有する役割があると改めて感じました。

**齋藤** 「論点整理」では、保護者に対しても、一方的な情報伝達ではなく、教育活動への参画を促すことが重視されています。

**山本** 「子どもにどんな力を身につけてほしいか」といったことを学校と保護者がともに考え、その実現に向けて何をすればよいかを対話できれば、保護者は学校の教育活動に深く共感するようになるのではないのでしょうか。

本校では、保護者の思いや悩みを起点に保護者と教員、学校医が語り合う「フレンドリートーク」を定期的に開催しています。そこでの対話を、学校と保護者、地域が一体となって学校教育を創っていく動きにつなげたいという思いがあります。

## 意図的に生み出した「余白」で教育の質を高めていく

**齋藤** 現行学習指導要領の継続・発展とはいえ、その取り組みを学校現場が負担に感じる場面も生じることが予想されます。

**戸ヶ崎** 私は一貫して、働き方改革なしに学習指導要領の趣旨の実現はありえないと訴え、戸田市では、教師用指導書にとらわれずに単元配分を見直す「単元主義」への転換や、チーム担任制の推進、専科教員による校内オンライン授業などを実施しています。そうして勤務時間内に余白を

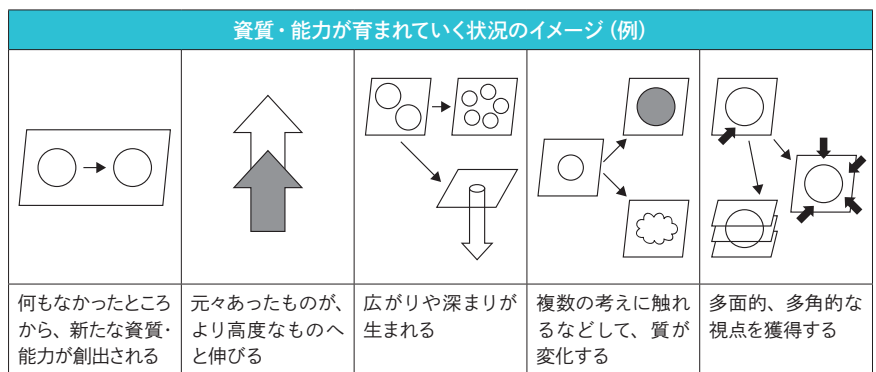
図1 戸ヶ崎教育長：生成AIを活用して「論点整理」の趣旨を整理



「論点整理」や、「論点整理」に関する有識者の見解など、様々な情報を生成AIに読み込ませて戸田市独自の資料を作成。同資料は、教員が「論点整理」の趣旨をつかめるよう、教員研修などで活用している。

※戸田市教育委員会の提供資料(戸田市教育委員会が生成AIを使用して作成)をそのまま掲載。参考資料:中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(2025年9月)など。

図2 山本教授：「深い学び」の具体化



「深い学び」がどのように発揮されるかは、各教科によって異なる。教員は、子どもがどのように学びを深めていくのか具体的なイメージを持ち、教員間で共有することが大切だ。

※山本教授の提供資料(横浜市教育委員会作成)を基に編集部で作成。参考資料:「資質・能力育成ガイド～学習評価編～」(横浜市教育委員会 2023年3月発行)。

確保し、教員が授業改善などに十分取り組めるようにしてきました。

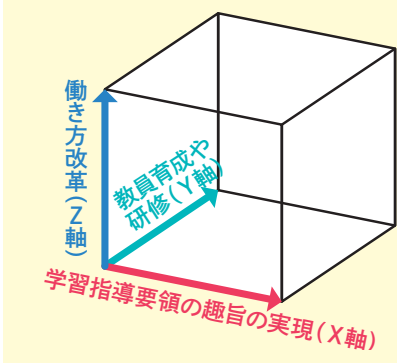
「論点整理」でも、時間的な余白を創出し、教育の質を向上させる方向性が示されましたが、それは現行制度下でも様々な工夫によって十分実現可能です。その際、教育委員会に必要なのは、**施策ごとに成果を求める部分最適ではなく、学校全体としての最大の成果を求める「全体最適」の視点**です。私は「働きがいを感じられる状態とは、自身の裁量を実感できること」だと思っています。それらをともに実現するためには、学習指導要領の趣旨の実現を「X軸」、教員育成や研修を「Y軸」、働き方改革を「Z軸」とし、それらを三位一体で立体的に捉えて施策を立案・推進することが大切だと考えます(図3)。

**齋藤** 教育委員会は全体を俯瞰して最適解を求めることが重要ですね。

**山本** 現場レベルでは、先生方が「論点整理」の趣旨を実感できる場を設けることが大切だと考えます。例えば「裁量的な時間」を先生方が前向きに捉えられるよう、一般的に分刻みで計画を立てる宿泊体験学習に、あえて自由時間を設ける。教員も子どもも「余白」を経験できるようにし、もし思い通りの成果が得られなくても、校長が「それは失敗ではなく、成功へのプロセスの1つだ」と歓迎すれば、教員は心理的安全性を感じ、各実践に前向きになれるはずです。

**戸ヶ崎** まさに「百聞百見は一験にしかず」ですね。実践を通じて「これならできる」という確信が持てれば、負担感はやりがいに変わるでしょう。

図3 戸ヶ崎教育長：三位一体の立体的な施策



教育委員会が、「学習指導要領の趣旨の実現」「教員育成や研修」「働き方改革」のそれぞれの施策を単体で考えずに、「全体最適」の視点で立体的に捉えて施策を計画・実施することが、よりよい成果につながる。

※取材を基に編集部で作成。

### 一人ひとりを理解する「臨床」の力が教員の専門性の中核

**齋藤** 教員としての専門性をいかに高めて、維持させていくかについて、どのようにお考えですか。

**山本** 教員の専門性の中核は、一人ひとりの子どもを深く理解する、医学で言うところの「臨床」の力だと考えています。その子がなぜ伸び悩んでいるのか、どこでつまづいているのかなどを、子どもとの対話と客観的なデータの両面から分析する力です。

そのような子ども理解は、教員が1人でしようとすると難しく、かといって放課後などに教員が集まって長時間話し合うのも現実的ではありません。横浜市内のある学校では、勤務時間内に15分程度、学年団の教員が集まる「ショート会議」を週1～2回行い、「今日、あの子どもがこんな姿を見せた」「この子の元気がなかった」といった子どもの見取りを共有しています。教員の様々な視点を学び合う機会にもなり、指導の質向上に結びついています。

**戸ヶ崎** 戸田市は産学官連携を戦略的に推進し、現在100以上の企業・大学等と連携しています。校長会で企業や大学等が学校現場で実証してほしい内容をプレゼンテーションし、その内容から各校は連携先を検討します。企業や大学が持つ最先端の知のり

ソースが学校に入ること、学びの質が向上し、子どもや教員が刺激を受けますし、業務のアウトソーシングによる教員の負担軽減も期待できます。当初は外部の人が学校にかかわることに抵抗感を持つ教員もいましたが、今ではどの学校も産学官連携の利点を認識しており、連携に積極的です。企業や大学などにとっては研究や商品開発のヒントを得る場にもなり、Win-Winの関係を築いています。

**山本** 教員が学校外の人と交流することは本当に重要です。実社会とつながり、多様な価値観を感じ取ることで教員が成長し、それが授業に還元されます。教員が自己研鑽<sup>けんさん</sup>にかけ時間を十分に確保するためにも、行政の支援が望まれます。

**戸ヶ崎** 戸田市は校務のデジタル化を図るとともに、校内ネットワーク

を一元化し、自宅からも校務システムに安全にアクセスできる環境を整えました。場所を選ばずに柔軟に働ける環境を整えることで、自己研鑽の時間を確保できるようにしています。

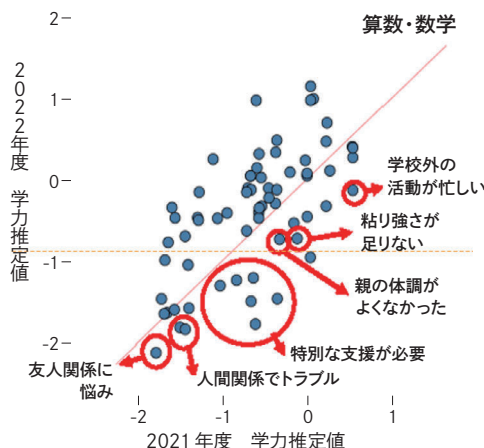
### データの積極的な利活用で、より精度の高い支援を実現

**齋藤** 次期学習指導要領を見据えて、デジタル活用はどのように深化させるべきでしょうか。

**山本** 教員が経験と勘だけに頼って指導する時代はもう終わったと考えています。私が勤務していた横浜市教育委員会は、子ども一人ひとりの学力や体力のデータ、健康状態などをまとめてダッシュボードに可視化するシステムを整備しました。市独自の学力・学習状況調査の結果分析も容易になり、子どもの課題をより具体的に把握できるようになりました(図4)。今後は、データの裏側にある子どもの感情や文脈を読み解く力が、教員の専門性としてより重要になっていくのではないのでしょうか。

**戸ヶ崎** 教育データの利活用に関しては、オープンデータ化が急務だと考えてきました。自治体単体ではダッシュボードなどを構築する予算を確保することは難しいですから、国が

図4 山本教授：データ分析を活用した個々の子どもの学びの可視化 算数・数学の例



青い丸(●)は2021年度と2022年度の学力推定値によって、個々の子どもをプロットしたもの。45度線より左上の子どもは2021年度から2022年度にかけて学力推定値が低下したことを示す。その分析から学力が低下した子どもを把握し、その子の状況を照らし合わせることで、日本語の支援が必要な子どもや、学級の友だちなどの支援が必要な子ども、家庭の事情への理解が必要な子どもなど、課題を見いだすことができる。

※山本教授の提供資料(横浜市教育委員会作成)を基に編集部で作成。

主導してフォーマットを共通化した方が効率的かつ効果的です。IRT(項目応答理論)を用いた子ども個々の学力の伸びの把握や、不登校の未然防止、早期発見・支援など、より精度の高い支援が可能になるでしょう。

**齋藤** 戸田市では2023年度に、教育における生成AIの利用に関するガイドラインを策定されました。

**戸ヶ崎** 生成AIは、もはや「使う・使わない」から「教育においてどのように適切に活用するか」の段階に入ったと認識しています。使用範囲を限定した生成AIを活用して、**子ども一人ひとりが自分の学習の相棒となる「マイPC」を育てる**という感覚で整備を進めています。今後は生成AIを対話のパートナーに、多様な考えや解釈の比較を通じて思考力を高め、リアルな学びを支えるツールとして活用するという議論も進めていきます。

生成AIの活用により、学習評価のあり方も変わりつつあります。生成AIが簡単にレポートを作成してくれる時代だからこそ、**提出された課題を基にどのようなパフォーマンスができるのかを評価することが必要になる**でしょう。また、将来的には、生成AIそのものが学習評価の一部を担う時代が来るとも推測しています。

## デジタルの力を借りながら、 最後は人の力で学びを個性化

**齋藤** 不登校の子どもや外国籍の子どもが増える中、「多様性の包摂」と「学びの個性化」が一層重要になってきています。



校長と教育長は「車の両輪」。  
現場の「臨床的な知見」と教委の「戦略的な支援」が  
かみ合っこそ、学習指導要領の理念が実現する。

**横浜国立大学 山本教授 (兼教育学部附属横浜小学校 校長)**

自身の裁量を実感できてこそ、やりがいは感じられる。  
現行学習指導要領での裁量を使い切り、  
今でもできることをすぐやるのが大切。

**戸田市教育委員会 戸ヶ崎教育長**



**山本** 「多様性の包摂」とは、子ども一人ひとりの「個性」や「人生」を尊重することにほかなりません。一斉学習では陰に隠れてしまいがちな子どもがいます。そうした子どもの声をデジタルの力も借りながら丁寧に拾い上げ、教室全体で共有し、認め合う。多様性を包摂し、一人ひとりの学びの個性化にもっと真剣に取り組まなければならないと考えています。その実現を担うのは教員です。経験からにじみ出る言葉こそが子どもの心を揺さぶります。子どもが成長する瞬間を見逃さずに認め、子どもとともに喜ぶ感性を教員がどう磨くか。それがこれからの教員育成に一層求められることの1つでしょう。

**戸ヶ崎** 学校には、これまで言葉にされてこなかった「暗黙知」が膨大に蓄積されています。戸田市は、子どもの学力を伸ばしている「<sup>たくみ</sup>匠の技を持った教員」に聞き取り調査をし、共通点を分析してループリックにまとめて言語化しました。若手教員が増える中、授業を見ただけではつかめない、「なぜ、この授業で子どもが伸びるのか」という暗黙知を言語化し、「共有知」に変えることが不可欠です。

**齋藤** 2030年度を待たずに今動くという姿勢が学校現場の空気を変えるのであり、今この瞬間から動き出すための確かな指針をお二人からいた

いただきました。最後に、全国の教育委員会や学校のリーダーに向けたメッセージをお願いします。

**山本** 校長と教育長は言わば「車の両輪」です。学校現場の「臨床的な知見」と教育委員会の「戦略的な支援」がかみ合っこそ、よりよい教育活動が実現し、学習指導要領は生きたものになります。次期改訂を待つのではなく、「今の私たちの実践が次のスタンダードを創っている」という自負を持って、みんなで目の前の子どもの成長を支えていくことが大切だと思います。

**戸ヶ崎** 教育委員会や校長は様々な施策がある中で、学校現場が混乱しないように重要な点を整理して伝える「通訳者」であり、教員にしかできない業務に専念できるようにするための「防波堤」でもあるべきだと考えます。「論点整理」の示す方向性がどんなに立派でも、それを実現できるかどうかは学校にかかっています。学校現場で理想と現実が乖離してしまわないように常に見届け、指導・支援していく必要があります。だからこそ、リーダーが「論点整理」の要点をかみ砕き、学校現場が納得できる言葉で語り直すことが何より重要になるでしょう。

**齋藤** 学校現場の暗黙知を尊重しながら、データを根拠に改善を図る、そして教育委員会や学校のリーダー陣が「ワクワクして未来を語る」ことが大事なのだと実感しました。教えていただいたことを基に、次年度は全国の教育委員会の施策や学校の実践事例を取材し、発信していきたいと思っています\*2。

\*2 『VIEW next』教育委員会版は2026年度よりウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただく形態での提供のみとなります。詳しくは、P.1をご覧ください。